

入江のほとり

正宗白鳥

青空文庫

長兄の栄一が奈良から出した絵葉書は三人の弟と二人の妹の手から手へ渡った。が、勝代のほかには誰も興を寄せて見る者はなかった。

「どこへ行つても枯野で寂しい。二三日大阪で遊んで、十日ごろに帰省するつもりだ」と筆でぞんざいに書いてある文字を、鉄縁の近眼鏡を掛けた勝代は、目を凝らして、判じ読みしながら、

「十日といえは明後日だ。良さんはもう一日二日延して、栄さんに会うてから学校へ行くといえのに」

「会つたつて何にもならんさ」良吉はそつげなく言つて、「今時分は奈良も寒くつてだめだろうな。わしが行つた時は暑くつて弱つたが、今度は花盛りに一度大和巡りやまとめぐをしたいな。初瀬はせから多武とうの峰へ廻つて、それから山越しで吉野へ出て、高野山へも登つてみたいよ。足の丈夫なうちは歩けるだけ方々歩いとかなきや損だ」

「勝はどこも見物などしとうない。東京へ行つても寄宿舎の内にじつとしていて、休日に

も外へは出まいと思うとの」勝代はわざと哀れを籠めた声音でこう言つて、さつきから一言も口を利かないで、炬燵こたつに頬ほお杖つえ突ついてゐる辰男に向つて、「辰さんは今年の暑中休暇にでも遠方へ旅行してきなさいな。家の者は男は皆な東京や大阪や、名所見物をしとし、温泉へも行ったりしとるのに、辰さんばかりはちつとも旅行しとらんのだから、気の毒に思われる。自分では東京へ行つてみたいとも思わんのかな」

「行けりや行つてもいいけど……」辰男は低い錆びた声で不明瞭な返事をして、口端を舐なめずつた。

「わしが東京にゐる間に来りやよかつたのに。下宿屋に泊つてて電車で見物すりやいくらも金はいらないんだから」

「勝と辰さんは電車を見たことがないのじゃから、兄弟じゆうで一番時代遅れの田舎者だ。勝は岡山まで汽車に乗つてさえ頭痛がするのにな、東京まで何百里も乗つたら卒そつと倒たうするかもしれないから、心配でならんがな。その代り東京へ行つたら、三年でも四年でも家へは戻らんつもりだ」

「わしの春休みの間に行くようにすりや、連れてつてやらあ。そうしたら歸りに大和巡りもできるしちやうど都合がいいんだよ」

「いやいや、勝は一人で行こう。それくらいの甲斐性がなければ、自分の目的を遂げられせんもの」

「口でこそ元気のいいことを言っているも、途中で腹が痛んだり、汽車に酔ったりしたらどうするんだい。自分の村でさえ出歩けない者が、方角も分らない東京へ行ってマゴマゴすると思うと心細くなるだろう。東京のいい家では、つい近所へでも若い女一人外へ出しやしないよ。栄さんが帰ってきたらよく聞いてみるとええ」

「死んだってかまわん覚悟をしとるんだもの……」

勝代は負けぬ気でそう言つて口を噤んだが、ふと不安の思いが萌して顔が曇つてきた。

良吉も話を外して、小さい弟をあやしなどした。

そこへ晚餐の報告が階下から聞えたので、皆なドヤドヤと下りて行つたが、勝代は一人後へ残つて、二三季度母の呼びたてる声を聞いてから、ようよう炬燵を離れた。机の上の絵葉書帖に兄の絵葉書を挿んだ。そして、目を擧めて、夕月の寒そうに冴えている空を仰ぎながら、雨戸を鎖して階下へ下りた。釣ランプを取囲んで、老幼取まぜて十人もの家族が騒々しく食事をしていた。勝代は空いた席へ割りこんで、独り生冷たい煮返しに柔かい菜浸しを添えて、まずい思いをして箸を執つた。

ほかの者の膳ぜんには酢味噌すみその飯い蛸だこや海鼠なまこなどがつけられていて、大きな飯櫃めしびつの山がみるみる崩くずされていた。

隣村まで来ている電灯が、いよいよ月末にはこの村へも引かれることに極うつたという噂うわさが誰かの口から出て、一村の使用数や石油との経費の相違などが話の種になつていた。電灯を見たことのない子供たちは、いろいろに想像しては喜んでいた。良吉はメートルとかスネツチとかタングステンとか洋語を持ちだして電灯の講釈をしだした。

「僕は東京の下宿にいた時には、五燭ごしよくの球を外はずして、二十五燭のを使つてたよ。そうすると昼のように明るかつた。こつちでもそうするといひ。一つで家じゆう明るくならあ。そして長い紐ひもで八方へ引張るさ」

「そんなことができるんかい。電灯も村へ来りやまるで断るわけにや行くまいから、まあ義理に一つだけはつけることにしようが、畢ひつきよう竟無用の事じゃ」と、老父は言つた。

「しかし、皆な電灯にすると、手数が掛らんし、火事の危険も少うなつてようございませぬ」と次男の才次はそう言つて、少くも二つは引かなきやなるまいと言張つた。そして、博覧会見物に行つた際に見た東京のイルミネーションの美しさを語つた。良吉もそれに相あ槌いづち打つた。

「夜も昼のようだ」

平凡で簡単なこの言葉ほど、都会を知らぬ者の心に都会の美しい光景を*いきいき*と描かす言葉はなかった。

が、辰男はこんな話にすこしも心を*そそ*げられないで、例のとおり黙々としていたが、ただひそかにイルミネーションという洋語の綴りや訳語を考えこんだ。そして、食事が終わると、すぐに二階へ上つて、自分のテーブルに寄つて、しきりに英和辞書の頁をめぐつた。かの字を*さぐ*り当てるまでにはよほどの時間を費した。

「ああこれか」と独言を言つて、捜し当てた英字の綴りを記憶に深く刻んだ。ついでにスベツチとかタングステンとかいう文字を捜したが、それはついに見つからなかった。

広い机の上には、小学校の教師用の教科書が二三冊あつて、その他には「英語世界」や英文の世界歴史や、英文典など、英語研究の書籍が乱雑に置かれている。洋紙のノートブックも手許に備えられている。彼れは夕方学校から帰ると、夜の*ふ*更けるまで、めつたに机のそばを離れないで、英語の独学に耽るか、考えごとに沈んで、四年五年の月日を送ってきた。手足が冷えると二階か階下かの炬燵の空いた座を見つけて、そつと温まりに行くが、かつて家族に向つて話をしかけたことがなかった。すぐ下の弟の良吉とは、一時隣国の山

間の小学校でいっしょに教鞭きょうべんを執つたことがあつたので、多少打融けた話もしていたのだつたが、それさえ年を経るとともに、隔たりが増して、この冬の休暇には親身な話はただ一度もしないで過した。

でも、良吉が傍で洗濯物や乾魚を小さい行李こくりに収めて明日の出立の用意をしかけると、辰男も書物を措おいてしばしばその方を顧かえりみた。

七八年前の冬休みに、兎うさぎを一匹もと需めて、弟と交互かたみに担かついで、勤先から帰省したことが、ふと彼れの心に浮んだ。

二

階下では、老父母も才次夫婦も子供たちも、あちこちの部屋に早くから眠りについて、階子段の下の行灯あんどんが、深い闇の中に微かすかな光を放つていた。二階では良吉と勝代とが炬燵炬燵に当つて、ひとしきり東京話を聞いたり訊きかれたりしていたが、やがて別々の部屋に別れて寝支度ねしたくをした。

「良さんには当分会えんかもしれんな。来年高考学校を卒業したら、なるべくなら東京の

大学に入れるような方法を取りなさいよ」と、勝代は兄の寢床を延べながら言った。そして、自分は寒さに傷まぬようと、かいろ懐炉を腹に当てて眠った。

弟と妹の安らかな寢息を耳に留めながら、辰男はまだ椅子に腰を掛けて、雑誌に出ている和文英訳の宿題をいろいろに工夫くふうしていた。アルハベットの読方から、満足に教師によって手ほどきされたのではないので、まったくの独ひとり稽古げいこを積んできたのだから、発音も意味の取り方も自己流で世間には通用しそうでない。二年間東京の英語学校で正則に仕上げてきた良吉にしばしば「田舎で語学を勉強したって骨折損ほねおりぞんだ、それより早く正教員の試験を受けた方がいいぜ」と忠告されて、父や兄からもそれを最も賢い方法として説とき勸すすめられたが、彼れは馬の耳に風で聞流して、否か応かの返事をさえしなかった。で、家の者は彼れの心を量はかりかねて、涼み台や炬燵の側での茶呑み話のおりおり、まじめの問題として持ちだされたことは二度や三度ではなかった。

「最初ヴァエオリンを習って音楽家になりたいと言ったのを聞いてやらないんだから、それであんな風になったのじゃないかと思う」と、ある時父が思当ったように言った。

「そればかりじゃない。鼻がまだ直りきらないのでしよう。ちよつと見ると拗すねているようじゃが、五年も六年も拗ね通されるものじゃない。身体に故こしょう障があるからでさあ」と、

才次は言った。

「あれじや商人あきんどにもなれんし、百姓にもなれまいし、まあ粥かゆでも啜すすれるくらいの田地を分けてやるつもりで、抛ほうつておくか」

とどのつまり、こう解決をつけて、もはや彼れの身の上を誰も問題にはしなくなった。見馴れた目には、彼れの行為もさして不思議には映らなくなった。

十一時が鳴ると、辰男は椅子を離れて押入から夜具を取りだした。そして、便所へ行った帰りに、階下の炬燵の残り火をかき起して、半身をずりこませて、気ままに温まった。おのずから睡気の差すまで、こうして過している二三十分間が、彼れには一日じゅうの最も楽しい時間であった……今日新あらたに習い覚えた英語を口の中で繰返していたが、ふと弟の明日の出立が思いだされて、自分が眠っている間に出かけられては残念な気がしたので、例いつもよりも早目に炬燵を出た。

闕しきいで仕切られているだけで、かつて襖ふすまの立てられたことのない自分の居間で、短い敷しきぶ蒲団とんに足を縮めて横になって目を閉じた。いつもならば、目を閉じるとすぐに睡眠に落ちるのだが、今夜は慣例を破って、まだ睡気もよおの催もよおさぬ前に炬燵を離れたためか、頭が冴えて眼つきが悪かった。

どこかの障子を破っている猫の爪音が煩さく耳についた。辰男は「シツシツ」と言いながら畳をパタパタと叩いたが、やがてランプを点けて音のする方へ行ってみると、猫はもはや障子の破れ目から縁側へ飛び降りて啼声を立てていた。兩戸を少し開けて猫を屋根の方へ追いだしながら、辰男は久しぶりに自分の村の夜景を眺めた。十数町を隔てた小学校へ往来するほかには、春にも秋にもほとんど一步も門を出たことがないのみか、家の周囲にどんな騒ぎがしていようと、めつたに窓の外へ顔出したことがなかったので、平生兩戸一枚隔てた外の景色とは馴染が薄いのだった。

夕月がすでに落ちて、幾百もの松明が入江の一方に絵のように光っている。耳をすますと小波の音が幽かに聞えたが、空も海も死んだように鎮まっている。宮を囲んだ老松は陰気な影を映している。彼れは他郷から帰省した者のように、今夜は少年時代の自分の姿を闇の中のあちこちに見詰めた。……もつと快活で元氣のよかった昔の事が未生前の時代のように心に浮んだ。

冬でも藪の笠を被つて浜へ出て、餌を拾って、埠頭場に立ったり幸神瀨の岩から岩を伝ったりして、一人ぼっちでよく釣魚をしていた。釣れても釣れなくても、兄弟や近所の友だちと遊ぶよりはおもしろかった。潮が満ちて瀉が隠れると衣服を胸までまくし揚げて、

陸へ上るので、衣服はいつも潮臭かった。あの時分は川尻に蘆よしが生えていた。潟からは浅あ蜷さりしじや蛸なまぐりがよく獲れて、綺麗きれいな模様をした貝殻も多かった。が、今は入江の魚が減って、岩のあたりで釣魚をしたって、雑魚ざご一匹針にかかってこないらしい。山や海の景色もあの時分は今よりもよほど美しかったように思われる。向いの小島へ落ちる夕日は極楽の光のように空を染めていた。漁夫の身体つきからして昔は巖いわのようだったり枯木くわのようだったりしておもしろかった。

お宮の松には梟ふくろうが棲んでいたので、その不気味ぶきみな鳴声を思いだしながら、暗こずえい梢せうを見上げていると、その木蔭から一羽の鳥が羽叩はばたきして空を横切っているような気がした。辰男は雨戸を閉めて寝間へ戻ってからも、何となくもの哀れな気持がした。側の壁に懸けておきながら日ごろ忘れはてていたヴァイオリンに目がついて、久しぶりで弾いてみたくなった。楽器を包んだ黄ろい袋は夜目にも目立つほど汚れていた。

山間の寂しい小学校にいた間、俸給あまの余剩まりを積あんで購あって、独ひとり稽古げいこで勝手な音を出して、夜ごとにこれもてあそを弄もんでいたことが、涙ぐまるるような追憶となつて、乾いた彼れの心を潤うるおした。

「明日の晩にはぜひ弾いてみよう。春高樓を弾いてみよう」……彼は新しい英字の変則

な発音よりも、昔馴染のヴァキオリンの変則な音色に、いつそう強く自分の魂が打ちこまれそうに思われた。

三

辰男の明方の夢には、蕨わらびの萌もえる学校裏の山が現われて、そこには可愛らしい山家乙女やまがおとめが真白な手を露むきだして草を刈りなどしていた。……と、誰かに呼びたてられたような気がして目を開けたが、左右の室には誰もいなかった。良吉はもはや出立したのかしらんと急いで階下へ下りると、弟は竹の手のついた煙草盆ひげを膝ひざに載せている父親の前に不恰好ぶかっこうなお辞儀をして、これから出かけようとするところだった。皆みんななが上り框がまちに突立って見送っていた。

辰男はそつと皆みんなの後に寄つて、黙つて弟の出て行くのを見ていたが、すぐに二階へ引返して、弟を乗せた俵くろまが浜はま通どおりを過ぎるのを見下した。俵の音の消えるまで窓ぎわを離れなかつた。

「良さんも行つてしもうた」いつの間にか勝代が傍に来ていた。「これで勝が出て行こう

ものなら、辰さんは二階に一人法師で淋しゆうなるぞな」

「……………」辰男は黙つてぼんやりしていた。

「早う嫁さんを娶りなさいな。小串にちようどよさそうなのがあつて、東屋の爺さんが話を持つてきたから、も一度よく問糺して、なるべくならあれにでも極めたいと、お父さんが言うておつた。少々気に入らんところがあつても我慢して、その人を嫁さんに貰うたらええにな。傍の者が皆な相応だと思つたら、辰さんもしいて否とは言わんでしよう」勝代は母親の命令で、何気ない風で兄の腹の中を索つてみた。

「……………そんなことはお前が訊かいてもええ」辰男は鬱陶しい声でそう言つて、自分の居間から齒磨粉と手拭をもつてきて、静かに階下へ下りて井戸端へ出た。大きな酒樽にどつさり大根が漬けられてあつて、大嫌いな糠味噌の臭いが鼻を襲つて逆吐きそうになつた。

勝代は、「何でああ変人なのであろう。家じゆうで私だけが同情してやつてるのじやないか」と忌々しく感じた。が、しかし、後ですぐに心を和けて、自分がこうしていっしよにいるのも今しばらくの間だから、できるだけ大切にしていあげて悪く思われぬようにしたいと思ひ返した。……………ほかの兄弟は皆な好きな学問をしているのに、辰さんばかりは一

生こんな汚い村の先生をして暮すんだもの、可哀そうだ。お父さんが不公平だと、兄の身の上を不仕合せな人として憫あわれんだ。そして、紙箒はたきを持って兄の机の上の埃ほこりを払いながら、書物の間に挿はさんである洋紙を覗いて、拙ますい手蹟で根気よく英字を書留めているのに、感心もし、冷笑を浮べました。その中には、同窓の誰にも劣らなかつた英語自慢の勝代にも解きえない文句が多かつた。

「Nonsense」という言葉には圈けんでん点をつけて、ノンセンスと仮名をも振つて大事そうに記している。

「あなたの言うことはノンセンスよ」などと、朋輩の間で言合つたことを勝代は思いだして独笑いをした。そして、「辰さんはこの英語の意味を理解しているのかしらん」と訊きたかつた。

と、そこへ、辰男は梅干で茶漬の朝食をすまして、齒を吸い吸い上つてきたので、勝代は押入から洋服を取りだしてやって、

「晩まで勝にこのテーブルを貸しておくれな。腰を掛けて勉強したら、お腹がよう減つて気持がようなるかもしれんから」

「……………」辰男は自分の机や椅子を他人に——たとい妹であっても——使われるのが厭で

あつたが、他人に向つて——たとい妹であつても——否と断言することはできなかつた。むろん快い承諾を与える気にもなれないのだが……

「使うてもよからう！　本はちやんとこのままにしておくがな」

「フーン」と辰男は微かな返事をした。カラアもネクタイもつけない洋服の上に短いトンビを着て、弁当を提げて裏口から家を出て、狭い車道を通つて学校へ向つた。

子供たちも揃つて出て行くと、広々とした家の中は大風の跡のように静かになつた。母や兄嫁は立ったり坐つたり、何となしに家事に忙しかつたが、勝代はぎつと二階の掃除をして、時間はずれの朝食を一人で食べると、下女に吩咐けて、二階の炬燵に火を入れさせて閉籠つた。良吉の帰つてゐる間入学試験の準備を怠つていたので、もはや小説など読みつけてはいられなかつた。上京までの日数を数えると心が惶だしかつた。……もしも落第をしようものなら、一年前に入学してゐる朋輩に対しても家の者や村の者に対しても、おめおめ顔は合わされない。とても生きてゐられないと、神経を昂らせながら、英語読本を披いた。

が、辞典を片手に精いっぱい研究していながら、心はややもすると書物から離れて、ほかの思いに疲れた。深夜も白昼のような東京で、落第した自分がモルヒネか何かの毒薬を

飲んで自殺する悲しいありさまを空に描いたり、西洋の婦人と自在に会話を取かわしている得意なありさまに胸を轟かせたりしていたずらに時を過した。運動不足のために、柔かい食物も消化が悪くて、勉強に取りかかると、腹の重苦しいのがいつそう気になった。

辰さんのように一心不乱に勉強するつもりで、炬燵を離れて兄のテーブルに向ったが、裾の方が寒くて、手の先も冷えて、とても長い辛抱はできなかった。で、ふたたび炬燵の側へ戻って、額を櫓の縁に押当てて、取りとめのない空想に耽りだした。好きな蜜柑を母親が籠に入れて持つてきてくれると、胃に悪いと知りつつ手をつけて二つ三つ甘い汁を啜った。

辰男は極った時刻に学校から帰って、テーブルの位置も書物の配置も乱されていないのに安心した。衣服を着替えて椅子に腰を掛けると、昨夕ヴァエオリンの音を恋しがったことを思いだして、壁の方へ目を向けたが、感興はいつの間にか消えていて、そんな物を手に執るのさえ懶かった。やはり英語修業に心が惹かれた。

夕日は障子の破れ目から、英文典の上に細い黄ろい光を投げている。下女はランプに油を注いで、部屋部屋へ持廻っている。

四

十日にはうまい魚を買溜めて待設けていたのに、栄一は帰ってこなかった。「もう四五日遊んで帰る」と、大阪の市街まちを写した絵葉書を寄越した。

誰よりも勝代が一番長兄の帰省を待ちかねて、母親に向ってしきりに噂うわさをしていた。

「栄さんが春まで家におつてくれると、勝も東京へ随ついて行けるのじゃけれどな、戻つたと思うと、すぐにまた行ってしまふんでしよう。東京で暮らすよりや田舎いなかに住んでおる方が仕合せだと、よく手紙に書いてくるけれど、自分だって、一月とも田舎にはじつとしておられんのだもの。……学問をした者は、こんな下等な人間ばかり住んでおる村へ戻つてきたつて話相手はないし、見るもの聞くものが嫌になつてしようがあるまい。勝には栄さんの心持がよう分つとるがな。……勝も今の間にせつせとお姉さんや祖母さんのお墓へ詣まつておこうと思うとるけど、途中で人に顔を見られるのが気味が悪いから、どうしても出て行かれん。勝は外を通つてる人の声を聞いても時々気疎けうといことがあるぞな。ようあんな下卑げびたことを大きな声で喋舌しゃべつてげらげら笑つておられると愛想が尽つきしてしまう。

こんな人間ばかりのいる村で一生を暮らすとすりや藁つんぼになりたいと勝は思うがな」

無口な母親は、娘の言葉に軽く雷らいどう同するだけだったが、才次が傍で聞いていようものなら、黙って妹に話を続けさせておかなかつた。兄弟じゆうではやや常識に富んだ穏かな彼れは、けつして烈しい口は利かないが、小間癩こましゃくれた妹の言語態度が女学生めいているのが氣に触さわつて、からかうか冷やかすかしなければ虫が収まらなかつた。

ある夜も勝代が、上京心得といったようなことを書いてある東京の友だちの手紙を母に読んで聞かせて、母子が炬燵に差向いで話しこんでいるところへ、筒袖つつそでを着た才次が、両手を細い兵児帯へこおびに突込んだまま、のそのそ傍へやってきた。

「お前の友だちは皆なペンで手紙を書くんかい」と、四角な桃色の封筒を手を取った。

「昔風の候そうろうずくめの手紙なら巻紙に筆で書くのがよう似合にあうとるけど、言文一致にや西洋紙にペンを使うた方がええ。第一一枚の紙にもぎようさんに字が書けて、お父さんの口癖の経済的にもなるんじやもの」勝代は皮肉をまぜて答えた。

「まだ友だち同士英語で手紙のやり取りはできんのかい」才次は差出人の名前を見て封筒を下へ置いて、

「この女も東京言葉を勉強しに、高い資本もとでを費つこうて東京の学校へ入つとるのかい」

「そないな悪口は勝らには何ともないがな。ここにおる者でも、手紙にはお互いに東京言葉を使うとるんじやもの」

「……東京の女子もへんてこな言葉を使うぜ。ちよつと道を訊いても、べらべらと言うて何やら訳が分らん」

「東京の人はいつたい口が早いんじやろうか」勝代はふとまじめに尋ねた。そして、卑しい田舎訛を朋輩に啜われはしないかと氣遣つた。

「口が早いばかりじやない、何かしらん忙しそうでゴタゴタした処じや。若い間はある町で好きなことをして暮らすのもよかろうが、歳を取つたらおれる所じやない。田地まで売つて大阪や神戸へ行つた者が、よくみい、たいていは失敗つてヒヨコヒヨコ戻つてくるじやないか。儲けて他所の錢を持つて戻る者は十人に一人もありやせん。たいていはこの貧乏村の錢を持ちだして都会へ捨てに行くんじやから、村はますます貧乏になるばかりじや。近い話が寺の坊主からして、わぎわぎ損をしに神戸へ投機をやりに行くというありさまだもの」

「来月の祖母さんの十三回忌までには、お住持さんは戻つてくるのじやろうか」と母親が口を出した。

「法事よりも村に葬式があつたらどうするつもりでしょう。坊主は寺の物を売飛ばして他所へ行つてもよからうが、そう荒して出られちや、後ではこの寺へ来てくれ手がないから檀家が迷惑じゃ」

「耶蘇教で葬式をすると、かえつて軽便で神聖でええがな。勝はお経も嫌いだし黒住のお祓いも嫌いじゃ」

才次は宗旨などどうでもいいので、妹が友だちの耶蘇信者が女学校で死んだ時の儀式の様子を話すのを難癖をつけずに聞いていたが、やがて、さつき言おうとしたことに話を戻して、

「家の者も東京なり神戸なり、出て行く以上は、その土地土地に一生落着くことにして、生活がむずかしゆうなつて生家へ転がりこまんようにきつぱり極りをつけとかにやならんと思う。都会住いをした者に田舎を手頼りにせられちや、こつちで質素な生活をしとる者は迷惑するし、第一割に合わん話じゃから、兄弟だからまさかな時にや世話になりやええという量見でおられちや共倒れじゃ」

「それは利己主義じゃがな……」

「どうせ皆なが利己主義じゃから、初めからそう極めとくに限るんじゃ。辰男だけはこの

村で別家さすにしても、こことは少し離れて家を建ててやるとええ。すぐ側に親類が並んでると、よけりやよし、悪けりや悪しで、嫉ねたんだりけなしたりし合つて煩うるさいものじゃ」「昔は兄弟は近い処におるのがええと言うて、高松の伯父さんなどはすぐ裏の地続きに、自分の家と間取りから柱の数まで同じい家を弟に建ててやったのじゃが、今時はそうは行かんじやろう」と、母親は反対もしなかつた。

「兄弟同士嫉ねたむことまで考えとかいでもええがな。家の兄弟にはそんな下等な人間はありやすまいに」

勝代は細い眉の間に皺しわを寄せて、「辰さんはあないな風なのに、誰もかもうてやらにや可かわい哀あそうじゃがな。勝は貧乏してもどこで暮らしとつても、辰さんの力になってあげにやならん」と、昂こつ奮ふんした調子で言つた。

「他人のことよりや、勝は自分の身の間違いのないように考えとれ。女子がぐずぐずして歳を取つて、英語を喋しゃべ舌べつて学校の先生になつたつて、何がおもしろいことがあるうぞい」才次は、眼鏡めがねを掛けた妹の平たい顔を憐あわれ憫れんな思しいをして見入つた。

「才さんに学資を出してもらやあせず……」勝代は兄がややもすると、自分の楽しい理想を破ろうとするのが口惜くしくて、こう言放つて、顔を見られぬように炬燵うつぶの上に俯伏した。

才次は渋い顔をして口を噤んだ。

「女子で月給取りになるのも、容易なことじゃあるまい」と、母親は感じのない声で独言のように言った。

皆ながしばらく黙つているところへ、辰男は階子段を軋ませて、のっそり下りてきて炬燵の空いた処へ足を入れた。

「辰さんはテーブルの下へ火鉢を置きなさいな。辰さん一人火の気のない処におつちや割に合わんぞな」勝代は今気がついたように言った。

「ランプを点けっ放しにしといちや危ないぜ」才次は二階から差してくる灯火を見上げて言った。

五

勝代は腹がチクチク痛みかけると、懐炉だけでは心許なくて、熱湯を注ぎこんだ大きな徳利とくりを夜具の中へ入れて眠ることにしていたが、ある夜、徳利の利目ききめがなくなつて真夜中ごろにしばらく忘れていた激しい痛みを感じだした。階下へ下りて母親や兄嫁を驚かす

のは気の毒であるし、それよりも自分の腸胃のまだ癒なほっていないことを家の者に知られて、東京行を引止められるかもしれないのが恐ろしくて、腹おきを圧おさえて呻うめきながら我慢していたが、疼いた痛たみは容易に収まらなくつて、呻うめき声は自然に高くなつた。

次の室に寝ている辰男の耳にも入つた。彼れはふと目を醒さまして、それと気がつきながら、妹の様子を見に行こうともせねば、声を掛けもしなかつた。寝返りを打つてふたたび眠りにつこうとした。が、呻うめ吟ぎがしだいに耳みみ障ざわりになつてしようがない。猫を追いだすようにこの睡眠じやまの邪魔物を遠ざけるわけには行かない。……で、彼れはランプを点つけて、そつと自分の寢床を、先日まで良吉のいた次の室へ持つて行つた。そこでは呻うめ吟ぎ声こゑがだいぶ遠くなつた。

「辰さん……」と、勝代は襖ふすまを洩もれる灯火に目をつけて、術なげな声を出した。

辰男は返事をしない。夜半の寒さに身震いして、寢床の中へもぐりこんで、灯火を消した。

勝代はふたたび兄を呼んだが、返事がないので、寢床から匍はいだして襖ふすまを開けてさらに呼んだ。「お父さんの机の上にある薬を取つてきてくれんかな」と頼んだ。薬嫌いで医者いしやがくれた薬さえ二度に一度は秘ひ密みつで棄すてたほどなのに、今の場合父の常用の消化薬をさ

え手頼りにする気になった。

たしかに兄は起きているのにと訝りながら、勝代は手索りでマツチを捜して、ランプを点けてみると、兄は例の処に寝ていなかった。近眼を顰めてようようその寢床を見つけると、腹を圧えながら側へ寄つて耳許で声を掛けた。誰にも知らさないでそつと取つてきてくれと頼んだ。

辰男は物をも言わず、突如に起上つた。そして、裾の短い寝衣のままランプを持つて階下へ下りて行つた。行灯の火は今にも消えそうに揺めいていた。彼れは父の部屋や兄の部屋には年に一度足を入れることがあるかないかで、部屋の様子がどうなっているか知らなかつた。

音のせぬように襖を開けて入ると、子供の時分から見馴れていた赤毛氈を掛けた机が、以前のとおりに壁ぎわに据えられてあつた。机の上には大きな硯や厚い帳簿や筆立や算盤がごたごたといっぱいに置かれてあつた。新聞に蔽われている碧い薬瓶を捜しだしながら、彼れはふと大谷円三という封筒の文字に目を留めた。母が先日問わず語りにつけていた縁談の周旋者の名前が大谷だったので、彼れは封筒を取上げて覗いたが、手紙を引きだして読もうとはしないで、元の処に置いた。そして、柱に掛つた寒暖計を見て、

「三十五度か、寒いわけだ」と思いながら部屋を出た。どの部屋からも安らかな寝息が洩れていて一人も目醒めていなかった。ガランとした家の中には寒い風が流れている。

勝代は待ちかねた薬瓶を兄から渡されると、すぐに手の平に薬を移して、「このくらいの分量で利くじやろうか」と兄に訊いた。

「そんな薬は毒にもならん代り利きやせん」と、辰男はぶるぶる慄えながら、顔を蹙めた妹の苦しげな様を見下していた。

「水を持つてきてくれなんだからよかろう」

「……徳利の湯で飲んだらよかろう」

もったいぶった兄の言葉を妹はおかしく感じた。教えられたとおりに、徳利の栓を抜いて口移しに湯を啜った。太息を吐いて、いくらか安らかな気持になって、

「階下では皆な眠とつたかな。勝は心細いから、もう少しそこで起きとっておくれな」

そう言われると、辰男は自分の寢床へ退くことができなかつた。

「勝はこないに身体が弱うちや困るがな。ほかの兄弟は丈夫なのに勝一人だけは……」

「……運動せんからじゃ」

「この村にや厭らしい人間ばかりおるから外へ出るのが恐ろしいもの。……辰さんは身

体が強いからええなあ。家じゃ姉さんが早う死んだし、勝も長生せんように思われるけれど、女子は婆さんになるまで生きておらん方が結句仕合せなように思われる。お姉さんは家で皆なに介抱かいほうされて死んだのじゃけれど、勝は他所の土地で一人で死ぬのじゃ」勝代は疼痛が和ぐのにつれて、こんなことを言つて涙を浮べた。

辰男は幾度も噓くさめをした。寒さに堪たえられなくなるし、妹の愚おろかな言草に興も起らないので、言葉の切れ目にその側を離れて、自分の寢床へ入った。夜具の中へ首をすっこめて足を縮めて、冷えた身体の暖まるので、いい気持になつていたが、すると今見た手紙の内容がいろいろに想像されだして、自分に女房のできるのが不思議でならなかつた。……学校の小さい生徒か母か妹かのほかには、女と口を利いたこともなければ、しみじみ女の顔を見たこともないので、思出にも若い女の影ははつきり浮ばない。山間の学校にいた時分には、土地の若い女に逢うと、極りの悪い思いをして顔を外そらせていたのだったが、今は平氣でいて自然に目がつかぬようになってゐる。……彼れは自分の縁談から、どんな男にも、女房のあることに思い及んで、妙な気がした。そして勝代が出て行つた後で、まだ見たこともない女と自分とが、この二階に住すまうことを、夢のように感じながら、ぐっすり睡眠ねむりに陥おちつた。

翌日学校の往帰りの途中でも、彼れはしばしば結婚について珍らしげに考えた。擦違すれちがう女の姿形を無心に見過せなくて、穢むさくるしい田舎女の一人一人が頭の中に浸みこんだ。テールに向うには向つたが、今日の英字の解釈に早く根気が疲れて、所在なきにしばしば机を離れては障子しょうじを開けて外を眺めた。

西風の風ないだ後の入江は鏡のようで、漁船や肥舟は眠りを促すような艚ろの音を立てた。海向いの村へ通う渡船は、四五人の客を乗せていたが、四角な荷物を背負せおうた草鞋わらじ脚絆きゃはんの商人が駈けてきて飛乗ると、頬ほお被りかぶした船頭は水棹みさおで岸を突いて船を迂すべらせた。辰男はしばらく船の行方ゆくえを見入っていたが、乗客の笑い話は静かな空気を伝って彼れの耳にも入った。入日の海や野天の風呂場をも彼れは久しぶりに見下した。夜はいつもよりも長く炬燵こたつに当って過した。

六

栄一が帰ってきたのは、予報の日取よりも遅れ遅れて、もはや誰も忘れたように、噂うわさにさえ上のぼりなくなつたころであつた。夕餐ゆうめしの膳ぜんが片づいて、皆ながあちこちへ別れている

ところへ、俣夫の提灯を先に、突如に暗い土間へ入ってきた。散らばっていた家の者はまたぞろぞろ出てきて一ところに集まった。勝代も物音でそれと知ると、書物を描いて二階から下りてきた。

が、辰男一人は椅子から身動きもしなかった。二三日前から作り始めた英文に心を打込んでいた。「眠った海」「無用な行為」などが、みずから選んだ課題であった。大谷が間に立つて取做しかけた縁談は、ろくに話し進まぬうちに立消えになって、父の口から明らかに彼れに告げて意向を確める必要もなくてすんだが、彼れは二三日妄想に悩んだだけで、元の彼れに返つて、テールに釘づけのようになっていられた。……

「風が吹けば浪が騒ぎ、潮が満ちれば潟が隠れる。漁船は年々殖えて魚類は年々減りつつあり。川から泥が流れて海はしだいに浅くなる。幾百年の後にはこの小さな海は干乾びて、魚の棲家には草が生えるであろう。……」こんな自作の文章を、辞書を繰っては、いちいち英字で埋めて行つた。

以前二三度英語雑誌へ宿題を投書したことがあつたが、一度も掲載されなかつたので、今はまったくそんな望みを絶つて、ただ自作の英文は絹糸で綴じた洋紙の帳簿に綺麗に書留めておくに止めている。自分ながら初めの方に比べると、文章はしだいに巧みになつ

ているような気がする。熟語などもおりおり使われるようになった。

階下が賑にぎわっているので、炬燵に当りに行くのを遠慮していたが、末の妹が息をせかせか吐きながら上つてきて、「栄さんのお土産みやげ」と言つて、栗饅頭くりまんじゅうを二つ机の上に置いて行つた。辰男はインキに汚れた骨太い指で抓つまんで大口に食べた。そして、冷くなっている手を内懐に入れて温めながらしばらく息休めをした。

妹と母とは、階下から夜具を運んで、次の室へ兄の寢床をのべた。と、間もなく栄一が上つてきたが、辰男の方をちよつと振返つたばかりで、次の室へ入つて襖を締めた。すぐには寝ないで、手紙を書いたり雑誌を読んだり、良吉が残して行つた書物を手に取つたりしていた。やたらに吸っている煙草の煙は、襖の隙間から洩れでて、辰男の顔のあたりに漂ただよつた。

階下が寢鎮みなぎまつてからしばらくたつて、栄一は部屋に漲みなぎつた煙を外へ出して、灯火も消して寢床についた。平生眠つきの悪いのが癖なのに、堅い寢床が身体に馴染なじまなくてますます寝づらかつた。

「辰はまだ寝ないのか。灯火が邪魔になつていけないな」

四年目で耳に触れた兄の声は、相変らず尖とがつていた。辰男はその声を聞くと同時に、ペ

ンを筆筒に収めてインキ壺つぼに蓋ふたをした。ランプをも吹消した。

翌日は日曜なので、辰男は目醒めても容易に起上らないで、寢床の中で書物を読んでい
た。お土産の栗饅頭を一つ母が枕許に置いて行つてくれた。風もないし、障子に差した朝
日は春のように麗うららかだった。

栄一は早く起きて海岸を散歩してきたが、朝あさ餐めし後に一時間ばかり読書すると、また外
へ出ようとして階はしご子だん段の方へ行きかけたが、ふと振返つて、「辰。……山へ登つてみん
か」と誘つた。そして、二三步辰男の居間へ踏みこんで、テーブルの上に目を据えた。

辰男は立上りぎま初めて兄の顔を熟じゆく視しした。……四年前よりも父の顔にいちじるしく
似通つていた。兄が身体を屈めて、英作文を一二行見ている間に、辰男は帽子を被かぶりト
ンを着て直立していた。

一人はステッキを持ち草履ぞうりを穿はき、一人は日和ひより下駄げたを穿はいて、藪やぶ蔭かげを通り墓地を抜け
て、小松の繁つている後の山へ登つた。息休めもしないで一気に登つたので、二人の額おろか
らは汗がぼたぼた落ちた。頂上近い処にある小祠まで来て、その側の石に腰おろを卸おろした。小
祠は田舎の郵便箱のような形をしている。扉とびらは壊れて中には枯松葉が散っているだけで、
神体はなかった。そこからは曲りくねつた海を越し山を越して、四国の屋島や五劔山が微

かに見えるのだが、今日は光が煙つて海の向うはぼんやりしていた。

草履を穿いている兄の方はかえつて足が疲れ息切れがしていたが、冷々とした山上の風に汗を乾かして爽かなさわや気持になると、今までの沈黙を破つて、弟に向つていろいろの話をしかけた。あちこちに見える島の名を訊いたり、近くすその山の裾の村々のありさまを訊いたりしたが、はつきりした答えは得られなかった。

辰男はまるで他郷を見わたしているようで方角も取れなかった。万国史で見た西洋の天子の冠のような形をした小さい島が入江から真近い処にあるのに今初めて気がついた。入江に出入りしてくる漁船は皆その側を通つているのに、彼れはかつてそこまでも行つたことがなかった。

「あれが鍋島だ。樹がよく茂つてるから、あの周囲にはよく魚が寄つてると言うじやないか」と、かえつて兄に教えられたが、そう聞けば島の名前は子供の時から聞馴れているのだった。

「しかし鍋よりも王冠によく似ている」と思つて、冠島という課題で英文を作ろうと思いついた。目の下の墓地も、海を渡つている鳥の群も、辰男には皆英文の課題としてのみに触れ心に映つた。飛んでいる五六羽の鳥は鳶とびだか雁がんだか彼れの知識では識別みわけられな

つたが、「ブラックバード」と名づけただけで彼れは満足した。

「辰は英語を勉強してどうするつもりなのだ。目的があるのかい」冬枯の山々を見わたしていた栄一はふと弟を顧みて訊いた。

ブラックバードの後を目送しながら、「飛ぶ」に相当する動詞を案じていた辰男は、どんよりした目を瞬きさせた。すぐには返事ができなかつた。

「中学教師の検定試験でも受けるつもりなのか。……英語はおもしろいのかい」と、兄は畳みかけて訊いた。

「おもしろくないこともない……」辰男はやがて曖昧な返事をしたが、自分自身でもおもしろいとおもしろくないとも感じたことはないのだった。

「独学で何年やっただって検定試験なんか受けらりやしないぜ。ほかの学問とは違って語学は多少教師について稽古しなければ、役に立たないね」

「……」辰男は黙って目を伏せた。

「それよりやそれだけの熱心で小学教員の試験課目を勉強して、早く正教員の資格を取った方がいいじゃないか。三十近い年齢でそれっばかりの月給じゃしかたがないね」

「……」足許で櫛の朽葉の風に翻っているのが辰男の目についていた。いやに侘しい気

持になつた。

「今お前の書いた英文をちよつと見たが、まるでむちやくちやでちつとも意味が通つていないよ。あれじやいろんな字を並べてるのにすぎないね。三年も五年も一生懸命で頭を使つて、あんなことをやつてるのは愚の極だよ。発音の方はなおさら間違いだらけだろう。

独案内の仮名なんか当てにしていちやだめだぜ」

「……………」

「なぐさみ娯楽にやるのなら何でもいいわけだが、それにしても、和歌とかほつく発句とか田舎にいてもやれて、へた下手なら下手なりに人に見せられるようなものをやった方がおもしろかろうじやないか。他人にはまるで分らない英文を作つたつて何にもならんと思うが、お前はあれが他人に通用するとても思つてるのかい」

そう言つた栄一の語勢は鋭かつた。弟の愚をあわれ憐むよりも罵り嘲のしあざけるような調子であつた。

「……………」辰男は黒ずんだ唇を堅く閉じていたが、目には涙が浮んだ。むろん他人に教えるつもりで読んでいるのではないし、他人に見せるために作つているのではないし、正格でないことはつねに承知しているが、全然無価値だこの兄に極められると、つくづく情なかつた。

「さあ、帰ろうか」と言つて、栄一は裾すその埃ほこりを払つて、同じ道を下つた。墓地近くになって、のろのろ下りてくる弟を待合せて、妹の墓と祖母の墓とへ詣まつた。目が窪くぼんで息の臭におがった妹の死にぎわの醜みにくい姿は、辰男の記憶にはまざまざと刻まれていて、妹というてすぐ思おもいだしたが、今墓場に立っていると、×子の墓と彫ほつた新しい石碑に対して追慕ついきほの感じは起らないで、石の下の棺かんの中で蛆うじに喰くわれている死骸しかいの醜みにくさが胸むねに浮うんだ。

僧侶そうりよが投機とうきに凝りだしてからは、寺は雨戸を鎖とぎして空屋のように汚れて、墓場の道は草が生え木の葉の散るにまかせていた。兄弟は朽葉を踏んで墓地を下つた。

「辰は家で許したら、学校へ入つて真剣に英語の稽古をしようという気があるのかい」栄一は前とは異つて穏かに話しかけた。

が、辰男は兄の言葉に甘えた快い返事はしようとはしなかった。「別段学校へ入りたいということはありません」と、干乾ひからびた切きり口こう上じょうで答えた。

「せめて、もう四年も早く決心して、強硬に親爺に説きつけたなら、東京に英語研究に行けんことはなかつたらうに。勝代さえ行くようになったのなもの。……しかし、お前は今からじゃあまり遅すぎるね」

家へ帰ると、辰男はほかに自分の置く処がないようにテーブルの前に腰を掛けたが、作

りかけの文章に目を向けるのが厭な気がした。

午過ぎになると、所在なくて、文典など読みだしたが、今までのようにかたわら人なきがごとき態度ではいられなくて、兄の足音が聞えると書物を脇へ片寄せた。

七

階下で両親や才次などが一家の雑務に取りかかっている間に、二階では三人が各自の部屋に籠って、それぞれに読んだり書いたりしていた。一人も他の部屋へ入ってむだ口を利用することもあまりなかったが、階下から才次などが上ってきて勉強を乱すことはなおさら稀まれだった。良吉のいた時分のような賑かな笑い声や打解けた雑談は二階では跡を絶っていて、栄一の帰省は勝代が予期したような明るみを家の中へ齎もたらさなかった。

栄一は自分を憚はばかっている辰男に向って話をして話しかける気はなかったが、でもおりおり辰男に対しては神経を凝っていた。ランプの下で難解な英字に青春の根気を疲らせている弟の青黒い顔の筋肉の微動をも、襖越しに見透しているように感ずることもあった。しかし自分に親しみを寄せたがっている勝代をば、きわめて淡く見過していた。妹の聞きた

がつている東京の女学校や女学生の気風について話をしてやるでもなく、妹の東京行について一口も明らさまに可否の意見を述べなかつた。二十未満はたちみまんの女が小説で知つてゐる東京に憧あこがれて、東京の何とかいう英語学校へ入つて、学問で身を立せて、一生独身で通すといふような乳臭い言いくさをまじめに聞いて、とやかくと無用な陳腐ちんぷな意見を述べる気になれないのだった。そして、ひそかに、「女の子にまで高等な学問をさせるようになった」とすると、家の身代にもだいなと思つた。

大勢炬燵を囲んでゐる時、

「わしが初めて東京から帰つてきた年に大病に罹かかつて座敷で寝てると、勝が蚊帳かやの側へ匍はつてきちや悪いたずら戯うらをしたり小便を垂れたりして煩うるさくつて困つたよ。それが一人で東京へ行くようになったのだから、わしも知らない間に歳を取つたのだね」と、栄一は幾年か隔てて会うたびに不思議なほど異つてゐる妹の顔を見入つた。

「栄さんよりや才さんの方が老ふけて見えるがな。才さんの頭にや白髪がぎょうさん生えてる。もう若白髪じやないなあ」勝代がそう言つて、兄たちの顔を見比べると、ほかの者も知らず知らず相互たがひの顔や頭に目を留めだした。よく見ると、離れてゐた間の年月は誰の顔にも刻まれていた。発育盛りの妹ばかり違つてゐるのではなかつた。

「何といつても四十近くなると、人間はそろそろ衰えだすんだね」栄一は弟に向つて言つて、「おれたちが一生にやりたいと思う好きなことをやってみるのは今のうちだぜ、金を活かして使うのも今のうちのような気がするよ」

「そのことはわしの方がいっそう本気で考えてる」と、才次は話に乗つてきて、「少し資本が続けば、この土地でもずいぶん利益の上る事業があるんじゃないやが、資本を自由に出してわしに任せてくれる者がからちつとも実行ができません」と言つて、老父がいつまでたつても、財産の一部も彼らに手渡ししない不平を微見かせた。

「おれは事業をやろうとは思わないが、今のうちに少くも気ままな旅行を試してみたいな、十分の路用を持つて、二三年西洋へ行つてこられればそれに越したことはないが、支那とか朝鮮とかあるいは日本の内地だけでも端から端までゆつくり旅行してみたいよ。も少し歳が老けると、足が弱つたり不精になつたりして長旅が厭になるし、旅行の楽しみというのが減つてくるからね。内地なら旅行費なんかいくらもかかりやしない。千円もあれば半年ぐらい方々で気楽に遊んでられらあ」

旅行費に千円とは、贅沢の極のように勝代は思つて、

「東京で暮すとすれば、見る物聞く物が何でも揃うとつて、旅行なぞせいでもよかろうに

な。東京でさえ年じゆういると単調になるじやろうか。勝は去年の春から家の門の闕しきいから外へ出たことは数えるほどしかないのじやもの」

「わしは旅行しようとも学問しようとも思わんが、自分の計画を一度は成功しても失敗しても実地にやってみにや寝覚めが悪い。この歳までたった一度も自分量見でやったことはないんじやから」と、才次は言った。

「何かおもしろいことがあるのかい」

「それはちよつと今言うわけに行かんのじやが、自分の得にもならんのに漁夫らの世話を焼いてやつてもつまらんからなあ」

「しかし、この村の漁場をよくして村を繁はんじょう昌じょうさせるのはおもしろい事業じやないか。食うに困らないで、そういう公共的の仕事をやってるのは愉快じやないかなあ」

「いや他人のことだと思つと張合いがない。漁夫の方からいうても、組長には相当な人間を他所からでも頼んできてそれで食えるだけの月給をやって働かせた方が得なのじや。月給を取らにや食えん人間なら、自然一生懸命に働いて、他村との懸合いでも漁場の見廻りでも、行届くだろうし、漁夫らの望みならむりなことでもやってくれるだろうが、名誉職の組長にやそんな真似はできん。むりな註文をおいそれと聞いて飛廻る気にやなれんから

なあ」

「そうかもしれないね」栄一は軽く弟に同意した。

「紀州の沖や土佐の沖じや、一網に何万と鱈たらが入ったの鰯いわしが捕れたのと言うけれどこの辺の内海じや魚の種が年年尽きるばかりだから、しだいに村同士で漁場の悶もん着ちやくが激しゆうなるんじや。漁夫もこのごろは将来の望みのないことに多少気がついてきて、思いきつて百姓になる者ができてきたが、百姓だと米の飯に魚を添えて食うわけに行かんし、こんな村じや海でも陸でもええことはない」

こう言った才次の言葉には力が籠こもっていた。

「しかし、ここいらの奴は皆な身体は強いし、ずいぶん過激な労働には堪たえるんだから、智慧ちえと資本のある者が先へ立つて使つてやれば役に立つんだが……」

「そりやどこでもそうだ」

栄一は深入りして弟の計画の底を叩たたこうとはしなかったが、才次は平生胸の中にもだもだしている不満な思いを兄にこそ洩ぼらし栄ぼえがするように感じて、何かと問わず語りをした。かなりの財産のある家から良吉を養子に欲しいと申しこんでいるのだから、早くその話を極めて家の負担ふたんを減らした方がいい、わずかな財産の分配をされるよりは本人のため

にもいいと言ったり、もしも夫婦養子の口があれば、才次自身たいていな家なら我慢して行つてやるつもりだ、こんなにくすぐずして歳を取っているよりはましだからと言つたりした。弟や妹が自分の知らない英語ばかりこそそ勉強しているのを彼れはさも目障りめざわでならぬといったような口調で話した。

しばらく黙つて聞いていた栄一は、「だけど、辰男が英語を楽みにして、一生通せるのなら、好きなようにさせといたらいいじゃないか。傍の者へ迷惑を掛けないのだから」と弁護するように言つた。

「さしあたつて迷惑は掛けんが、しかし、家族の一人として毎日同じ飯櫃めしびつの飯を食うと、自然に傍の者の気を悪うすることがあるんじや。白痴ばかでも狂人でもないんじやから、ほかの兄弟並に扱わにやらんし、なおさら始末に困るが、どうも不思議な人間じや」

「おれの子供の時分の気持に似てやしないかと思う。おれも家にじつとしていたらあなつたかもしれないよ」

栄一は微笑しながらこう言つて、弟の話を外した。

勝代はとつくに炬燵を離れて、小さい弟を連れて座敷の縁側へ出て日向ぼっこひなたをしていた。落葉や鶏の糞ふんで汚れた小庭へ下りて久しぶりで築山へも登つたが、昔の庭下駄は歩き

つけない足にも重くつて、じきに息苦しくなった。

八

栄一は毎日の日課として後の山へ上つて沖を見わたした。瀬戸通いの汽船が島々のかなたにはつきり見えて、春めいた麗かな日光の讃岐の山々に煙っていることもあれば、西風が吹荒れて、海には漁船の影もなくつて、北国のような暗澹たる色を現わしていることもたまにはあつた。そんな風の強い日には、大きな家の中がさながら野原のようで、いくら襖や帯戸を閉めきつても、どこからか風が吹きこんで、寒さを防ぐ術もなかった。

「これでは冬籠りもできないね。早く東京へ帰ることにしようか」と、栄一は故郷の様子を見ただけで満足して、ふたたび都の小さい借家へ帰ろうとした。不漁つづきで、海鼠や飯蛸などの名産もあまり口へ入らないし、落着いて勉強もできないし、ことに家族の中に交っていると、きゆうに歳を取ったような気持になるのが厭だつた。

「明日のうちに立とう」と、栄一はきゆうに決めたが、ひそかにそれを喜んだのは、辰男だつた。明日の晩から、何時までランプを点けていようとも、もはや苦情を言う者はなく

なるのである。彼れの英語の発音を試験したり、彼れの英文について無慈悲な批評を下したりしたがるそぶりを見せて驚かす者がなくなるのだ。……辰男はこのごろ英字に親しめなくなつて、ややもすると心が外へ散つて、寂しいつまらない気持がしだしたのを、兄のせいと思つていた。

「この書物を読んでしまったからお前にやろう。荷物はなるべく軽くしときたいから」と、出立の前の夜、栄一は弟のテーブルの上に英書を二冊置いて行つた。

辰男は表題と著者の名前とを見詰めたが、読方をも意味をも判じかねた。そして知らない文字に攻められるのが恐ろしさに、内部をば開けてみないで、手馴れている自分の書物で蔽うて机の片隅へ押遣つた。

今夜一晚と極つたため、階下の炬燵には皆なが集まつた。珍らしく親爺も加わつて何かしら話が賑つていたが、辰男一人は相変らず、二階にじつとしてゐる。書きかけの英作文にも取りとめのない疑いのみしきりに起つて容易に書続けられなかつたので、懐手をしてぼんやり、風に唸っている障子を見ていた。すると心が弛んで、われ知らず机に頭を垂れて仮寝をしだした。

やがて、夢の中の物音に驚いてふと目を醒ますと、ランプは机の向うへ押落されて、火

は障子に燃移っていた。……辰男は氣抜けがしたような顔をして突立ちながら、声も立てず、すぐには手出しもしなかった。……外では風がザワザワ音を立てている。晝は石油に浸って青い焰ほのおを吐いている。……「この家は焼ける」と思うとともに、灰燼かいじんになった屋敷跡が彼れの心に浮んだ。

やがて、彼れは両手に力を入れて、何年も動かしたことの無いテールを書物の載っているまま、次の室へ移した。そして、座蒲団を丸めて、火を叩たたきけ消そうとしているところへ、階子段にけたたましい足音がした。

「火事だ……」と、栄一の慌あわてた叫声が階下にいる人々の耳を劈つんざいた。外を通っていた者をも驚かした。

大勢がどやどや駈寄って、口々に荒い言葉で指図さしずし合って、燃えついている障子を屋根から外へ抛ほうりだしたり、バケツや手桶ておけで水甕みずがめの水を掬すくってきたりした。父の目も血走った。妹も息を切らして素足で井戸端へ駈けた。皆なが騒ぎだすと、辰男は後退りをして薄暗い処に突立っていた。石油が燃えつきるとともに火の手はみるみる衰えたが、彼れのテールも書物もずぶ濡ぬれになってしまった。転げ落ちたノートは半ば灰になってひらひらしていた。

さつきから辰男の不注意を罵つていた父や兄は、火が消えて心が落着いてから、いちよ
うに彼れの方へ目を向けて問詰つたが、石のように身動きもしないで、堅く口を閉じて
いるのに呆れて、しだいに相手にしなくなつた。

畳を上げて汚れ物を片づけて、念のために二階の部屋部屋を見廻つて、階下へ下りたが、
誰も皆睡気を醒ましていて、子供までなかなか寢床へは入らなかつた。

見舞に來た隣近所の者が歸つて、表の戸を卸した後、草臥休めの茶を沸して駄菓子
を食いなどして、互いに無事を祝して夜を更した。

「電気にしとけば、こんな危険はないのだがね」と、栄一が言うと、父は、

「電気は不経済なばかりじやない、柱や鴨居へ穴を明けて家を台なしにするから考え物じ
や。今夜のようなことがあるとすると保険はつけといた方がええかもしれんが」

「辰の奴、何かろくでもないことをしてかしやせんかと思つた。これからは夜遅くま
でランプを点けておかせんようにしましょう。勝も他所へ行つて辰一人が二階に
いることになると不用心でしょうがないから」と、才次は眉根を擧めた。

「しかし、こんなことはめつたにあるまいが、とにかく今年じゆうには嫁を取らせて、別
家させて、自分の始末は自分でやらせることにしたら、ちつとは普通通になるだろう」

「さあ」才次は父の言葉は空々しく受けて、「一軒の家の災難はどんなことで湧いてこんとも限らん。今夜にしても、もう十分遅う気がついたら取返しがつかなんだのじゃ」

皆なの言葉が止切れたところへ、時計が一時を打った。寒そうに風が音を立てている。父は手燭を点けて部屋部屋を見廻つて自分の寢室へ入った。

勝代は焼跡の隣で眠るのが厭さに、いつまでも炬燵こたつの側にて仮睡をしだした。兄二人が最後まで話かたに耽ふけっていたが、そこへ辰男は忍足で下りてきて、便所へ行くが早いかすぐに階子段を上った。

「まだ起きとるんか」と、才次は声を掛けた。気にかかったので、手燭を点けて見に行つたが、辰男は焼跡の隅つこの畳に夜着を被かぶつて寝ていた。

「栄さんの室にいつしよに寝たらいいじゃないか」と柔やよぎしく説いたが、
「わしはここでええ」と言つて、辰男は枕を直して目を閉じた。

闇の中に目を閉じていても、辰男は絶えず周囲の汚れた焼跡を頭に描き鼻で嗅かいでいた。ぐちゃぐちゃになつている書物や帳面を日に乾さねばならぬと思つたり、何と何とが焼け失せたか検しらべてみなければならぬと思つたりしたが、このまま塵屑ごみくずにしてしまいたい氣もした。……机上に安んじていた彼れの堅固な心が長兄の帰省前後から破れかけていたの

に、今夜の災難は最後に下された槌つちのようだった。

すると、学校から帰った後の毎夜毎夜の長い時間を何もしないで持てあましている自分の姿がみすぼらしく目先にちらついた。……以前ふとヴァキオリンが厭いやになったころには、語学に興味が起つて、心がその方へ吸寄せられたが、今度は新しい道は開かれそうではなかった。

陰鬱いんうつな気懶けだるい気持が夜が更けるにつれて刻々に骨の髄ずいまで喰いこんだ。そして、いつそ今夜の火事が拡がって、机も書物も家も、自分自身も焰えんの中に包まれて、燃えてしまえばよかつたように思われだした。

家から家へ火が移つて、村一面に焰の海となつて、見覚えのある村の者どもが顔や手足を焼焦やけどがして泣叫なげんでいる光景を彼れは夢みた。

九

翌朝辰男は火事話を避けるために、起きるとすぐに家を出た。始業時間までにはよほどの暇があつたので、所在なさに、先日兄あにに随ついて上つた山の方へ足を向た。墓地を抜ける

と、一步一步眼界が広がって、冴えた朝日は滑かな海を明るく照らしていたが、昨夕の不快な記憶が彼れの頭から消えなかった。先日のように目前の眺めが英文の新たな材料として目に映らず、永の年月自分を押籠めた牢屋の壁か何かのように侘しく見えた。……この先五年十年この土地にどうして生きていられるか生きる術が見つからなかった。

白い雲の漂っている海の向うへ出て、どこともなく旅から旅を続けたらと、ふと家出を考えたが、それも一瞬間の妄想に止まって、旅費なしには一日か二日も他郷へ出かける無謀な勇気を彼れは持つていなかった。「見ず知らずの人は一椀の麦飯も食わしてはくれない。ただでは汽車にも汽船にも乗せてくれない」ということを彼れは今さらしみじみと考えたが、それにつけても、今まで無用な書物を買ってこんで月々の俸給を浪費したことが後悔された。で、これまでの俸給のすべてを貯蓄していたらば、いくらいくらになつていたので、諳算をしながら、山を下つて学校へ行つた。

授業を終えて帰つてみると、兄は昨夕の騒ぎのために、出立を一日延していた。火事の跡始末がついていて、障子が新に張替えられ、テーブルも久しぶりで綺麗に拭かれてあつたが、濡れた書物は西日の差した縁側へ乱雑に抛りだされてあつた。乾いて皺をつくつていた。

辰男はそれらを本箱に収めて、紙切一つ置かれていないテーブルの前に腰を掛けた。

『Fire』 『Conflagration』 『Nonsense』 などいろいろの英語が頭脳の中に黒く綴つづられながら現われた。

新に買った二分心のランプを小さい妹が持ってきたが、辰男は日が暮れても灯火を点けなかった。記憶に刻きこまれていた英語を闇の中で果もなく綴つづっては崩し、崩しては綴つづりしていた。兄がすでに整ととのえている旅の荷物を乱すのが厭いとさに、終日何もしないで退屈たいくつ醒さましに、勝代に英語を読ませたり、不審な字句を解いてやったりしているのが、襖越ふすまこしに彼れの耳へも入った。

「辰はそこにいるのかい、ランプも点けないで」栄一は襖ふすまを細目に開けて暗がりを透かし見して、「ここへ来い、ここへ」と、むりじいに空いた座へ招いた。

妹の机には青い机掛けが掛つて、その上には木彫の奈良人形と、亡妹の写真を挿んだ写真立があつた。毛糸のランプ敷すに据すえられたランプの明るい光は、差向いで炬燵こたげに当つている兄弟の手に持った英書を照らしていた。辰男は灯光の邪魔にならぬような処ところに坐つた。「わしも学校にいた時分には、会話に身を入れて、西洋人の夜学校へも通つたりして、一時はたいいの事は自由に話ができたものだ。しかし今はまるでだめだね。ちよつとした

挨拶さえよく考えなくちや英語で言えなくなつたよ。日本にいりや外国人と話をする機会はないし、会話の研究こそまつたくのむだ骨だつた」

栄一は妹の「実用会話集」に出ている日常の用語を久しぶりで口ずさんだが、勝代は兄の唇の微動を見入つた。自分も二三年したらあんな風に巧みに操れるだろうかと広々とした気持ちになつて、

「……田舎者よりや東京生れの人の方が英語の発音が早く上手になるんでしよう」

「なぜ？ 同じことじゃないか」

「……田舎は日本語の発音でも下等で頑固がんこじゃから、それが癖になつてしまつて英語でもすらすらと音が出しにくいんじゃないかと思うがな」

「そんなばかなことがあるものか。……勝も東京へ行つて三月もすると、東京言葉を使つて田舎者をばかにするようになるだろうな」栄一はそう言つてから、辰男に向つて、「お前は今から学問したつて追いつかんから、農業か何か実業をやつてみい。そんな頑丈がんじょうな身体をしているし、辛抱強いのに、机の前で萎いじけてるのはつまらないじゃないか。先こない日山だから見た島を借りて桃を栽うえても、後の泥山を拓ひらいても何かできそうじゃないか。

兄弟の真似をしないで、お前一人は泥まみれになつて本當の田舎者になつちまうさ」

「そんなことはできやせんなあ、辰さん」と勝代は代って答えた。「去年二百円も出して、青年会の人が松を山へ栽うえたんじゃけど、じきに枯れてしまうたのじゃもの、桃もつく処へはどこへでも栽うえてるし、この辺の土地は衰すい微びしるとも今よりようなりやせんと思は思うがな。この先の島は漁夫が巡査に見つけられんように賭博とばくを打ちに行く処になつとるんじゃもの」

「へえ。あれが漁夫の賭博場かい。そう思つてみるとおもしろいね」栄一はひとかどのいい思いつきのつもりで言ったことを、妹のためにたやすく打消された照れ隠しにこう言つて、

「しかし、自分で鋤すきくわ鋤くわを持って働くつもりなら何かやれんことはないさ」

「それはやれないことはありません」と、辰男は意外にはつきりした返事をした。

「じゃ、田地を分けてもらつて、百姓になりきつちやどうだい」

「そういう気にもなるんだけど……百姓をして米や麦をつくつてもおもしろうないから」

「おもしろくなくつても、田圃たんぼに麦や、米ができなきや困るじやないか。……西洋の草花でも造りや綺麗きれでおもしろいかもしれないが」

「花なら自然に生えてるのが好きじゃ。山におつた時分に植物の標本をちよつとは集めた

「ことができました」

「植物の採集もこの辺にや珍らしいものはあるまいが、作州の山には高山植物があるんだらう」

「へえ。いろいろ珍らしいものがありました。二三百は異つたのを集めてかげぼし蔭干にして取つといたのじゃけど、あちらの学校を止めた時に皆な焼いてきました」

「そりや惜おしいね。学校へ寄附しとけば植物学の教授に役に立つのだらう」

「名が分らんから教える時には役に立ちません。私にだけにしか誰にも分らんでしょう」辰男は雑草でも木の葉でも手あたりしだいに採集して、でたらめな名前をつけていたのだつた。

「それで満足できるかね。世間で極めた名前を知らずに集めてばかりいても楽しみになるのかい」

「へえ。あの時分は楽しみにしとつたんでしよう」

今夜はなぜだか珍らしくテキパキと話すのを聞いていると、栄一は弟の辰男を、永年家族が極めているような低能児とも変人とも思われぬ気がした。が、顔を見ると、光のな鈍い眼、小鼻の広い平たい鼻、硬そうな黒い皮膚がどうしても愚おろかものらしく彼れを見

させた。他人から慈愛を寄せられそうな潤みや光は、身体のところにも持つていない。

「何か望みや不平があるのなら明ら様に言つたらいいじゃないか。おれが立つ前に聞いといたら、多少お前のためになるようなことがあるかもしれないぜ」と、栄一は優しく訊いて弟の心の底を索ろうとしたが、

「そんなことは他人に言うたつてしかたがありません」と、辰男は冷かに答えた。押返して訊いても執念く口を噤んで、よそ目には意地悪く見えるような表情を口端に漂わせた。「しかたがないつて、お前なんかつまりは兄弟の世話にならにや生きてられない時が来るんだよ。両親の達者な間に方法を立ててもらつとかなきやだめじゃないか、むだなことばかり気ままに勉強していても、食う道はちつともついていないのだから」

兄の声が尖つてくると、辰男は目を伏せて心を外へそらせた。

「勝は学校を出てお金を取れるようになったら、辰さんにあげるつもりじゃ、勝は利己主義は嫌いじゃから」勝代は気取つた口を利いた。

これで話を止めて、栄一は横になつて、挽春の響きを聞きながらうつらうつら仮睡の夢に落ちた。勝代は温かすぎる炬燵で逆上せて頭痛がしていたが、それでも座を立とうとはしないで、

「口が粘^{ねば}つて気持ちが悪いから蜜柑^{みかん}を食べたいがな。辰さんは奢^{おご}つてくれんかな」とねだつた。

「お前が自分で買いに行きや奢^{おご}つてやらあ」

「勝は物を買ひになぞ行つたことはないのに。およしでも使にやりやええがな」

「自分で行かんのならわしは錢を出さんぜ」辰男は頑^{かたく}なに言つた。

「辰さんは時々意地の悪いことを言うんじやな」

勝代は階下へ行つて母にねだつてもらつてきた蜜柑の一つを兄の前に置いたが、辰男は手に取らなかつた。

十

栄一は翌朝俣^{くろま}で村を離れると、のびのびした気持ちになつた。二里も隔つた停車場までの途^{みち}すがら俣夫はしきりに村の話をして聞かせたが、それによると、隣県の者が近いうちに乗合馬車をこの近所の国道へ通^{くわだ}そうと企てているそうである。

「そうしたらお前たちは困るだろう」と訊くと、「馬車などは永続きはしますまい。何で

もその金主は、性の悪いことをして監獄へ入つとつて、このごろ出てきたばかりじゃそうですから」と俣夫は答えて、「若旦那はたくさん金を儲けてお帰んなさったんじやと皆なが言うとりますがな」

俣夫の話が自分のことや家族のことに関係しだすと、栄一は相手にならなかつた。そして、汽車に乗ると勝代の顔も辰男の顔も心に薄らいで、ただ入江のほとりの古めかしい大きな家の二階にあんな弟妹の住んでいるのが、憎みも愛もなく顧みられた。

「辰はおれが遣つた〇〇の英文小説を読むかしらん」と、ふと、思ったが、それも瞬またたく間に消えてしまった。

辰男は二三日テーブルの前に懐手をして腰を掛けたまま夜を過した。妹の頁をめくる音を聞きながら……。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集」 正宗白鳥集」 集英社

1969（昭和44）年7月12日発行

初出：「太陽」

1915（大正4）年4月

※誤植を疑った箇所を、「入江のほとり」春陽堂、1916年発行の表記にそって、あらためました。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：住吉

校正：山村信一郎

2015年9月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

入江のほとり

正宗白鳥

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>